

平成15年(2003年)5月20日(火曜日)

The Sekai Nippo

世界日報

## 上昇気流

「私の人生の大半は青函トンネルとともにあった」とは、先日亡くなられた北海道大学名誉教授・佐々保雄さんの言葉である。青森と北海道南端の地質を調査して論文に発表したのが昭和九年。北大理学部地質学教室助手だった▼この論文をきっかけに青函トンネルとの縁が始まったが、同トンネルの地質委員会ができたのは戦後の昭和三十年であり、トンネル貫通は六十三年。歳月の長さがこの言葉の重みを実感させる▼札幌に生まれ、東大理学部在学中は、内村鑑三の聖書講座に毎週通った。父親は、内村らが札幌につくった独立教会の長老を務めていた。大学を卒業した昭和三年、

内村が亡くなる。彼の最後の弟子であった▼地質学教室の野外調査で聖書講座を欠席すると、「先週どうした」と詰め寄られた。が、怠けたのではないことが分かると、博物学の好きな内村は地質の話に興味深く耳を傾けたという▼札幌第一中学二年の時から登山を始め、病みつきになり、北海道の大自然を愛した。昭和五十六年には、西堀栄三郎氏からバトンタッチされて日本山岳会会長に就任▼同年、西堀氏から「ぜひやってほしい」と勧められたのが国際ハイウェイ・日韓トンネルの計画。日韓トンネル研究会が設立されると会長を務めた。両国を結ぶトンネルに経験のすべてを注ぐとしていた。九十六歳だった。夢は若い世代に託されたのだ。